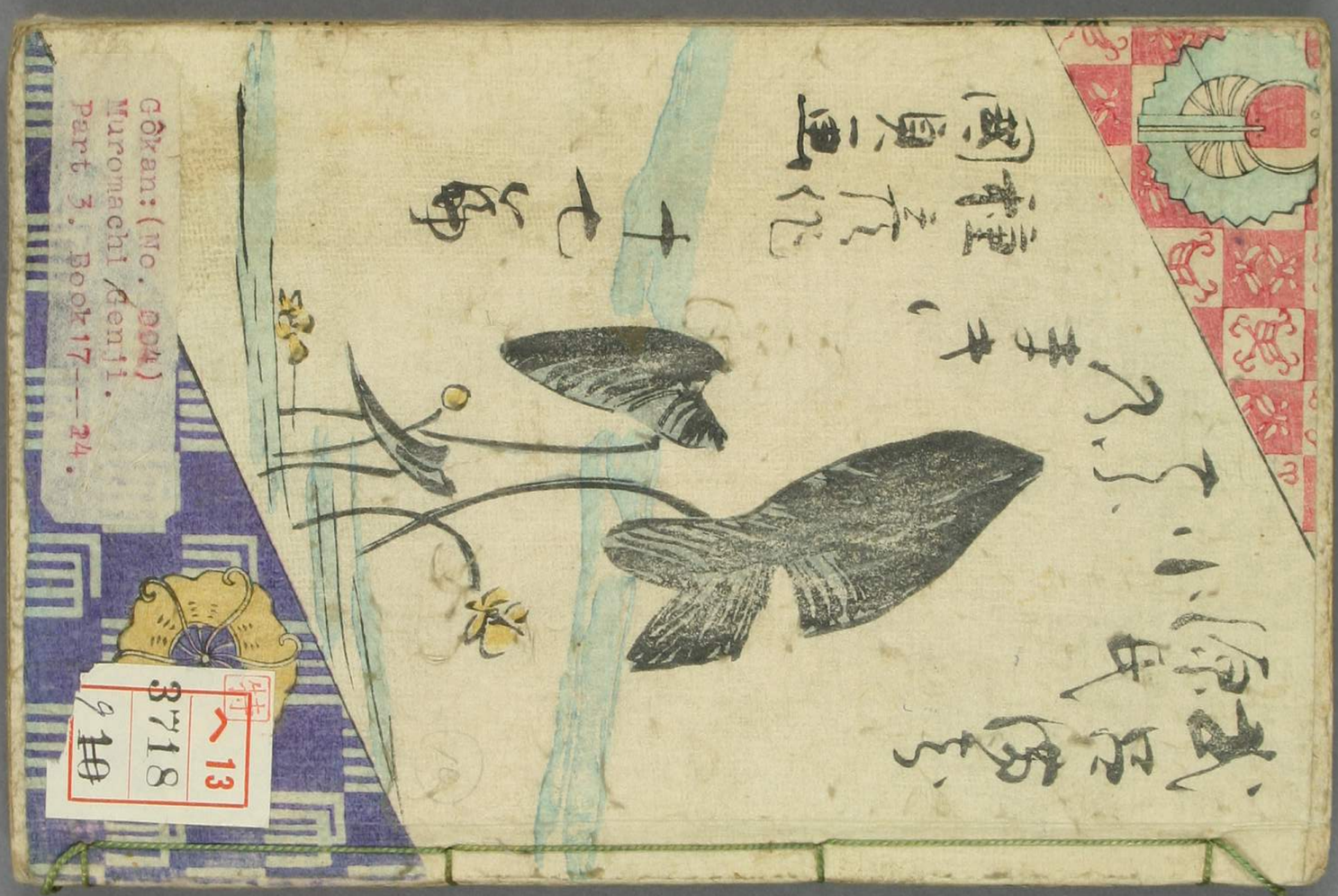
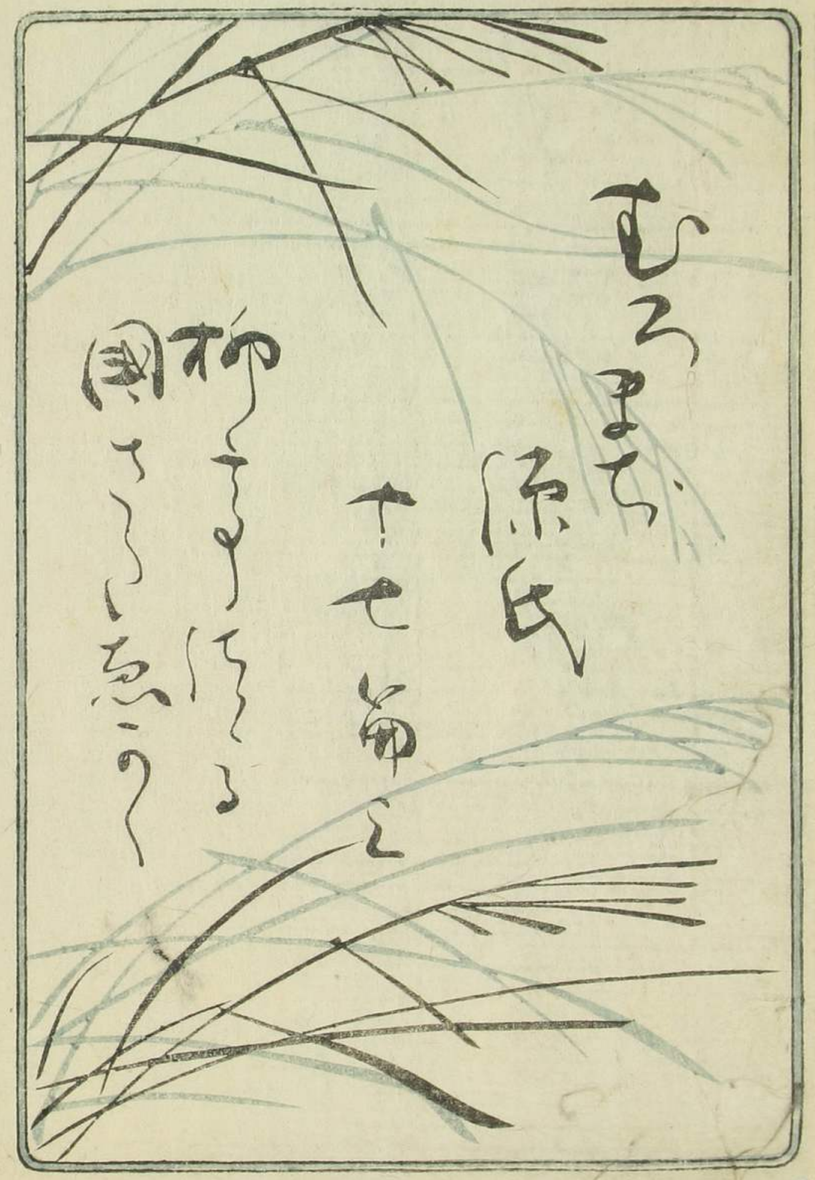

Gōkan:(No. 004)
Muromachi Genji.
Part 3. Book17--24.

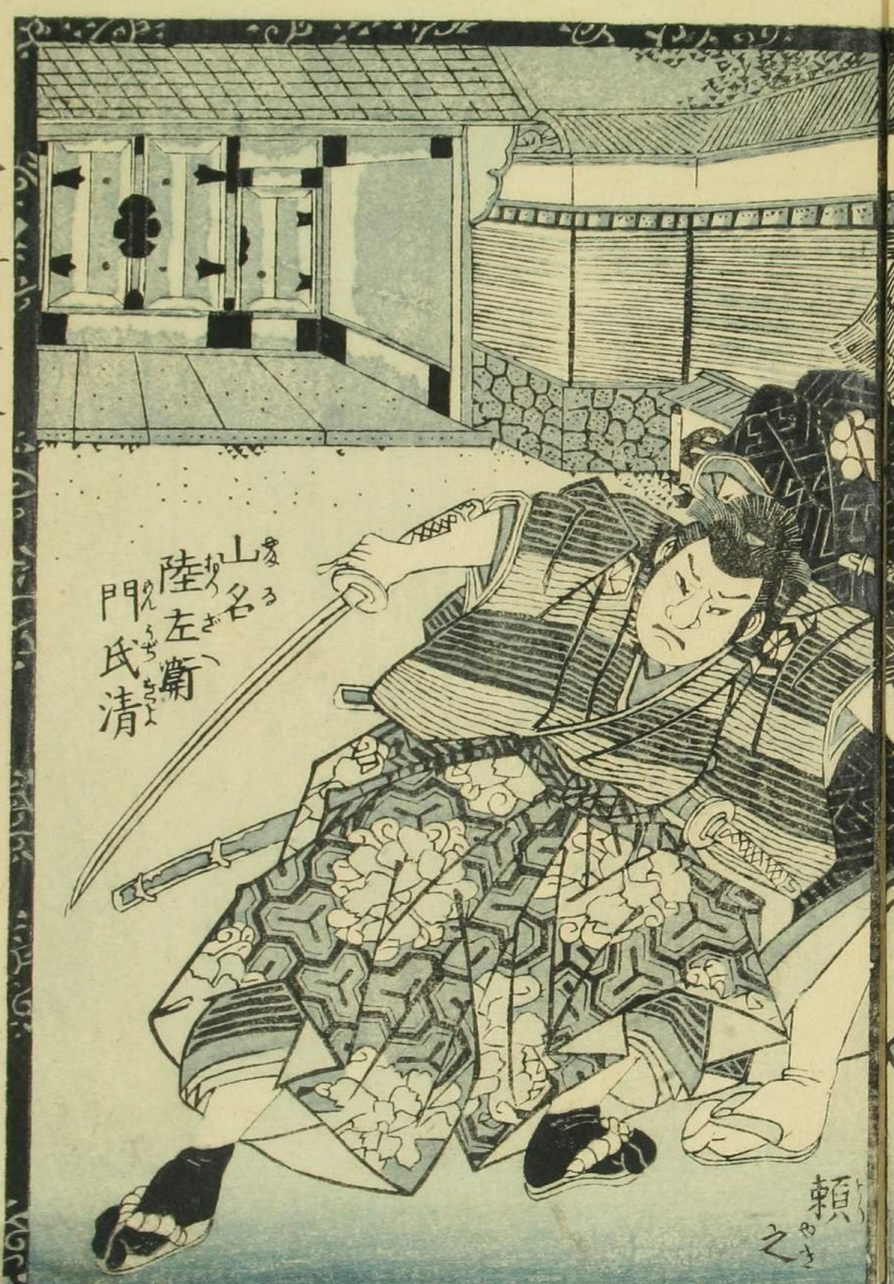
門 へ13
號 3718
巻 10



一

或人自己に難じて曰开も此編の冠首なる通氏未だ忘満七たる頃南蠻渡来の鳥銃を隠し持しを國犯として功にも賞なく罪科と極む是巻中の發端なりさるを編数程も經ぜ義満扈従に命令し鳥銃を以て廣沼を驚さんとも條あり大事に用し鳥銃もら其罪重しと言なるをかゝる小支に取用也義満其罪輕しと言んか餘に眼先を換んとして前綴条漏の事なるぞや と言まて自己もぬからぬ顔に原来有益の品なりせバ通氏ゆゞて鍛冶に命じ其製法を納得させ器械を造手術を傳授程なく諸侯鳥銃を用ひざる所なきに卦り況や義満氏の揀擇小事といへども用ひざらんやと答に其客なりで退きしに自己から可笑此席に換たり

柳亭種彦記

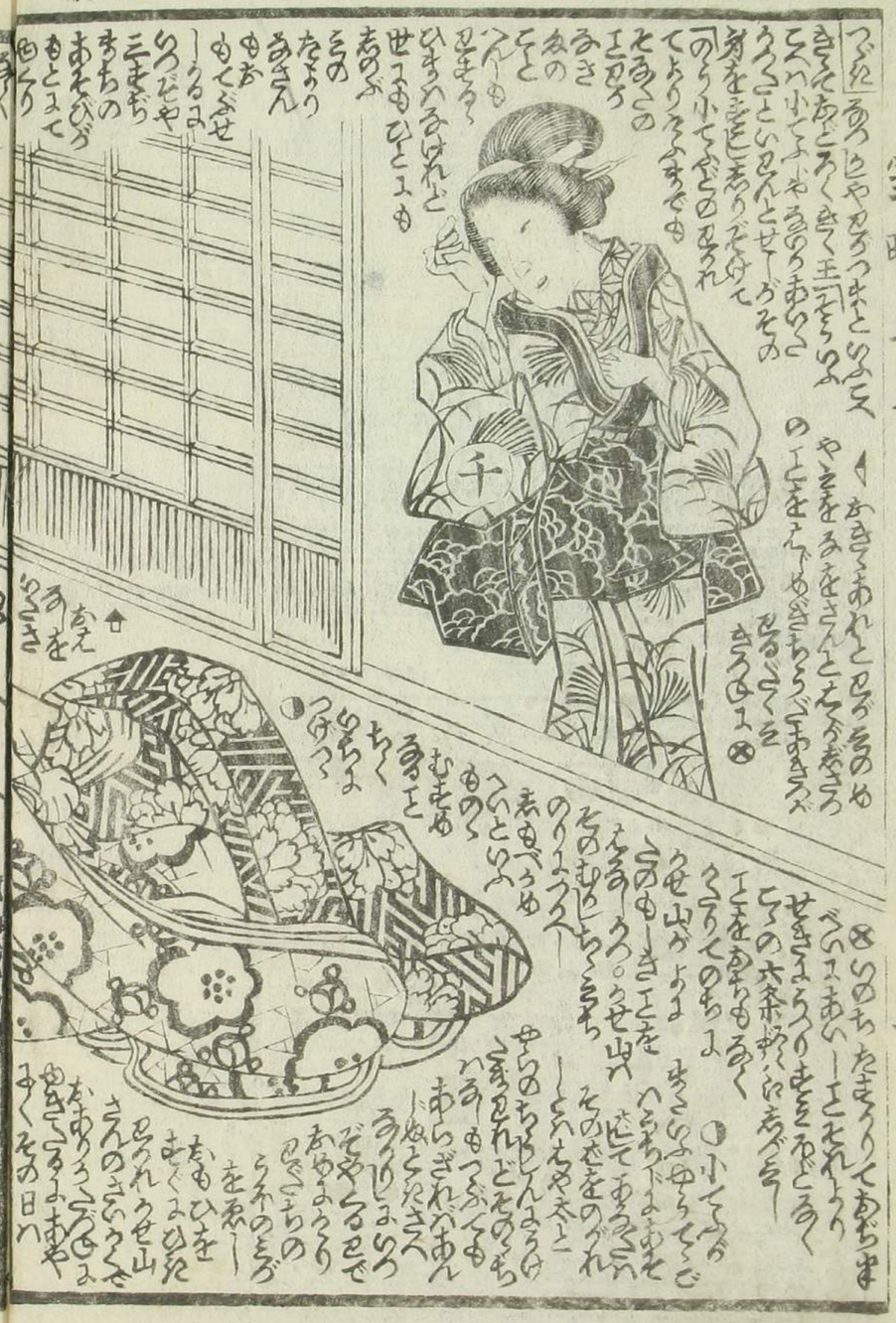


山名陸左衛門氏清

頼之

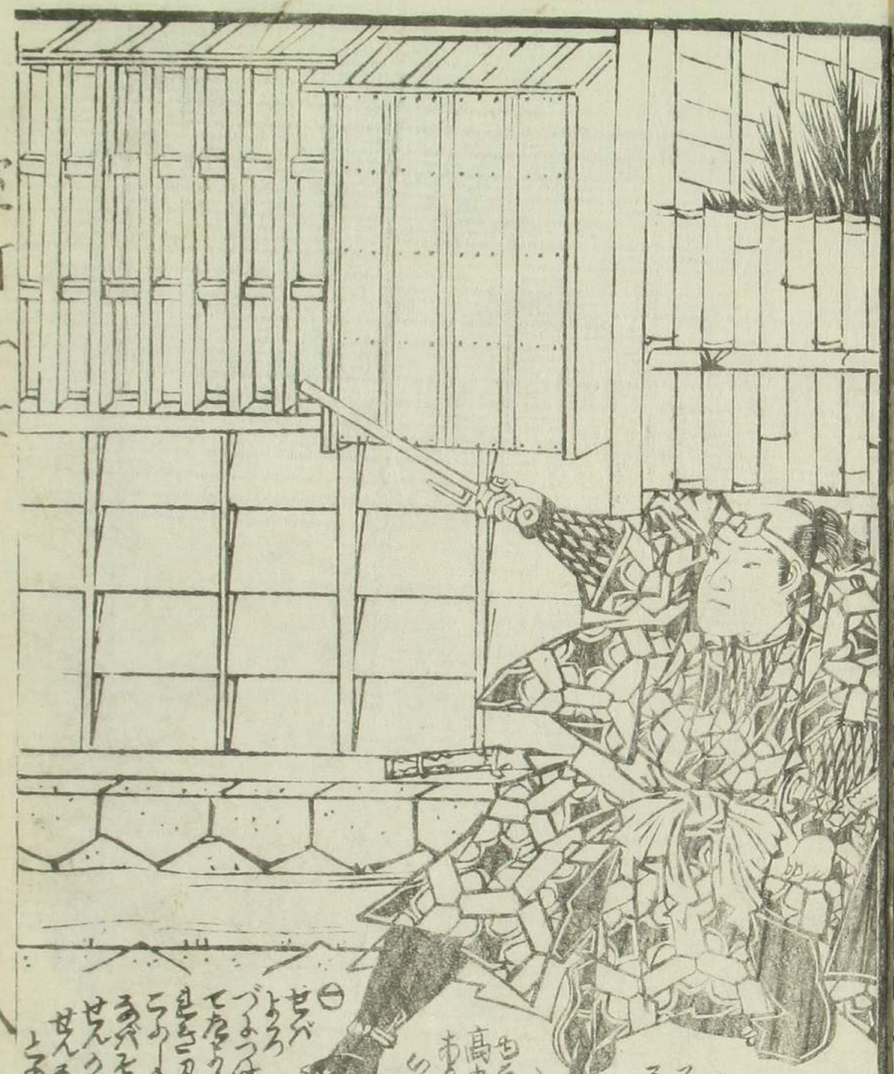
足利義満公

音川右京亮



氷

此所小使無用



本家
實母散
松方實母さんの家ハ中そし事てんま町一丁目西ゴ
ゴて年来賣弘々来りは所店をせ及ず此度同和
向東ゴ引ゴ入りれ以ゴ本家ハ月向年殿上ハ
中橋南傳馬町一丁目東ゴ
千葉堂孝輔製

厚化粧萬年嶋田

五篇より
九編まで

爲永春水作
梅蝶樓國貞画

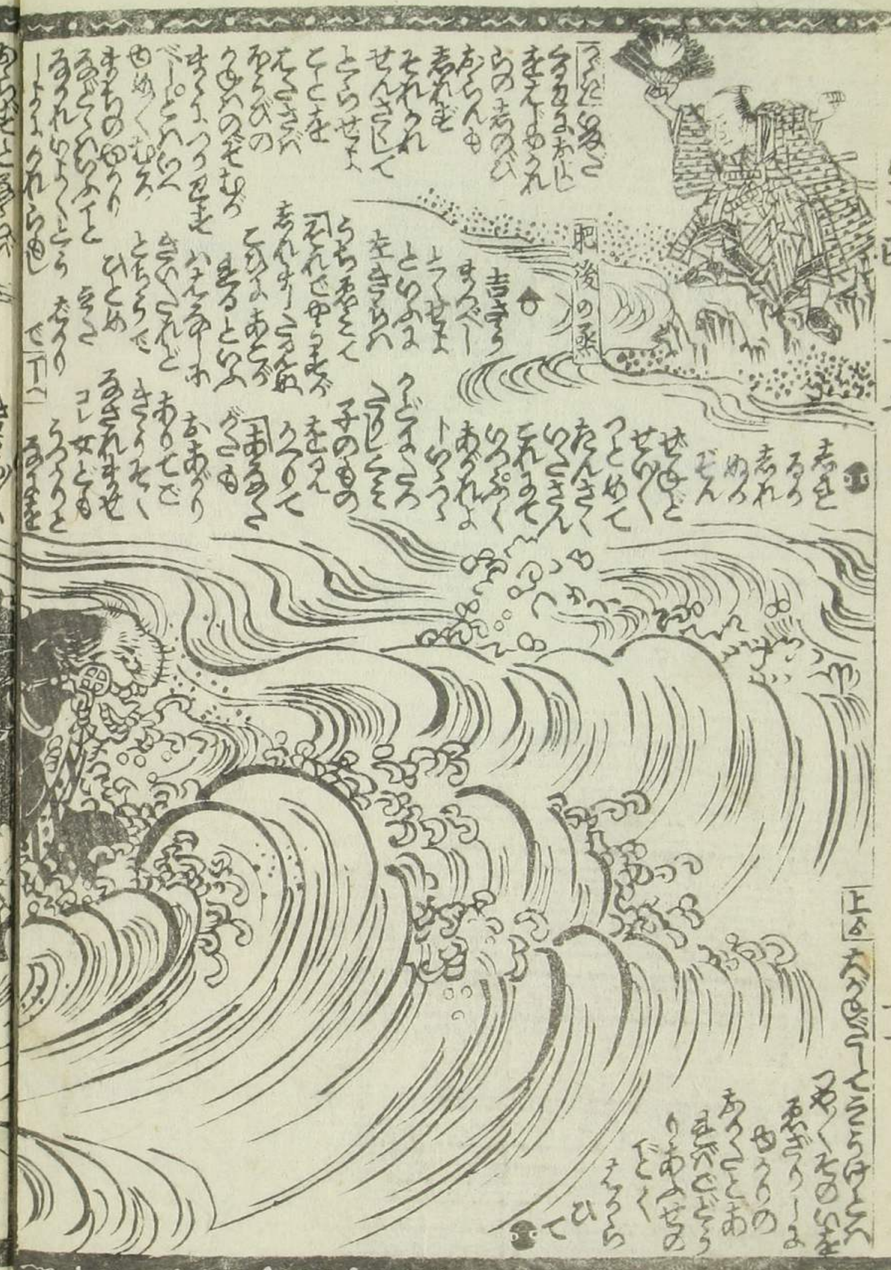
柳蔭月朝妻

初篇より
追々出板
午春秋たん

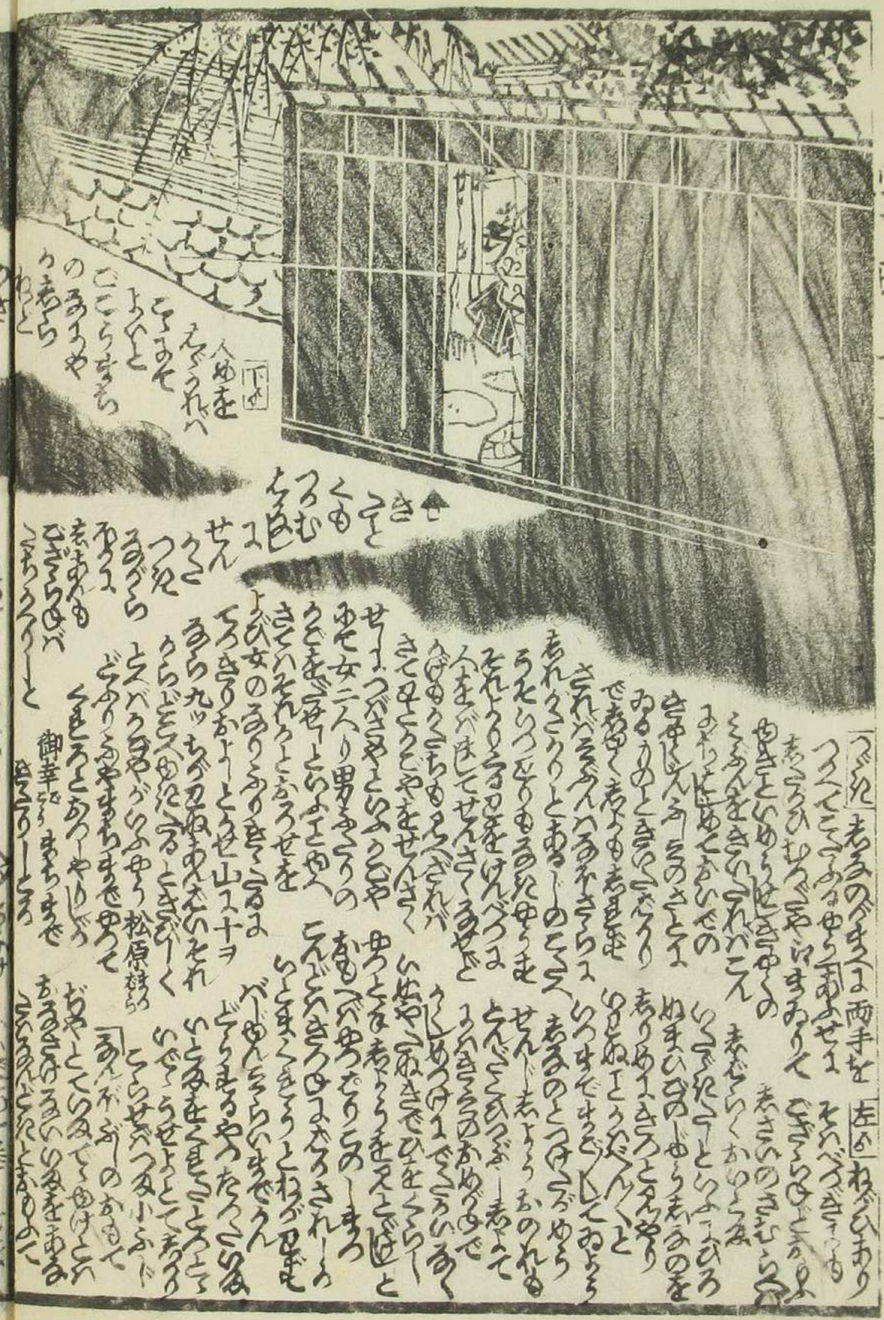
山々亭有人作
梅蝶樓國貞画

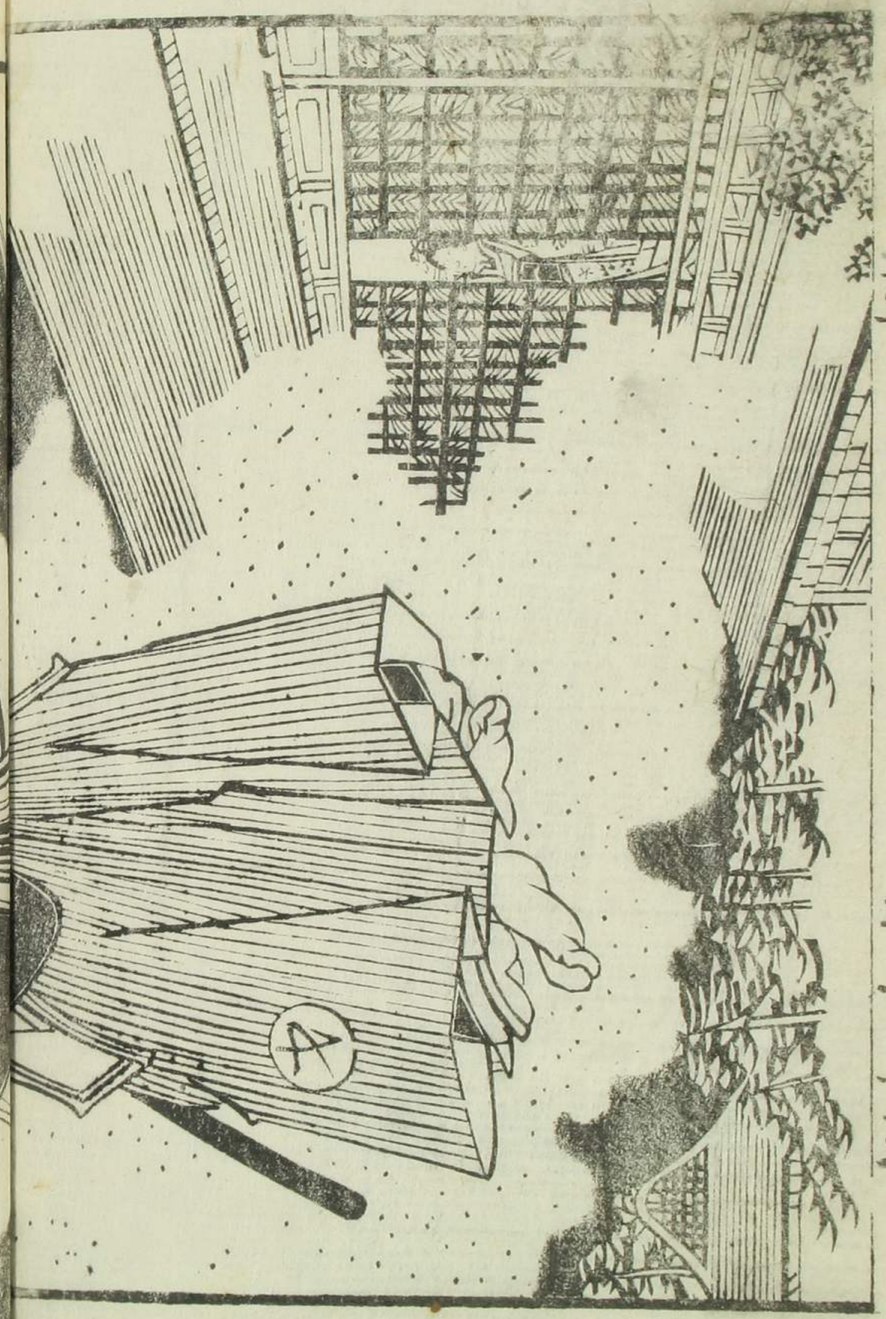
這ハ一蝶が名にしおふ朝妻舩の唱歌にもとづき彼の足利義教が
さだうり堅固の性なるを廣澤子太郎といふるもの女色を以て心迷ひ
一時出頭なしたりしも賢才英智の勝元と智を爭ふの長譚其他
祈願所眞海が身を亡ぼすの淫乱なるしあれにおかしき肺色
多けれバ
作合初編より御高説のほど伏ち年希ハ

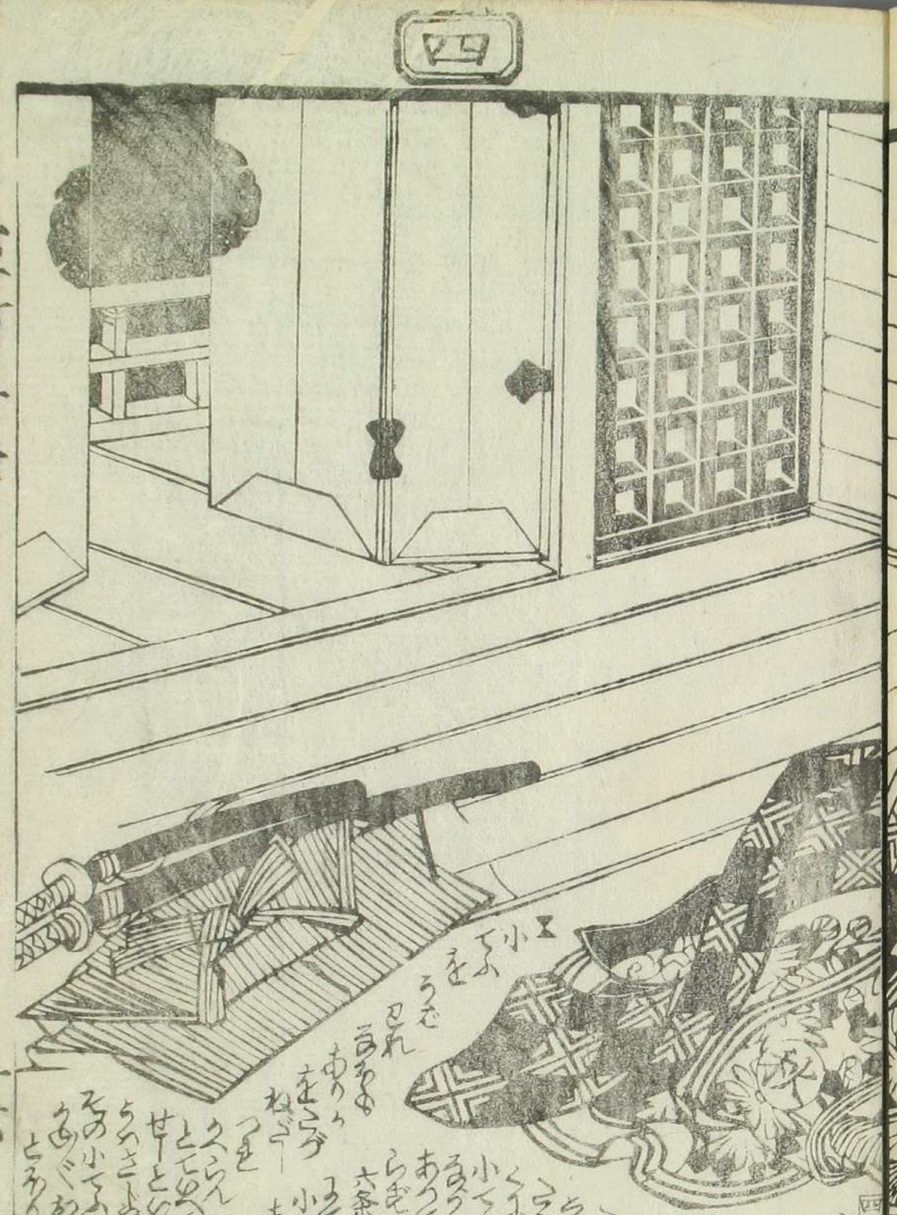
十七扁下

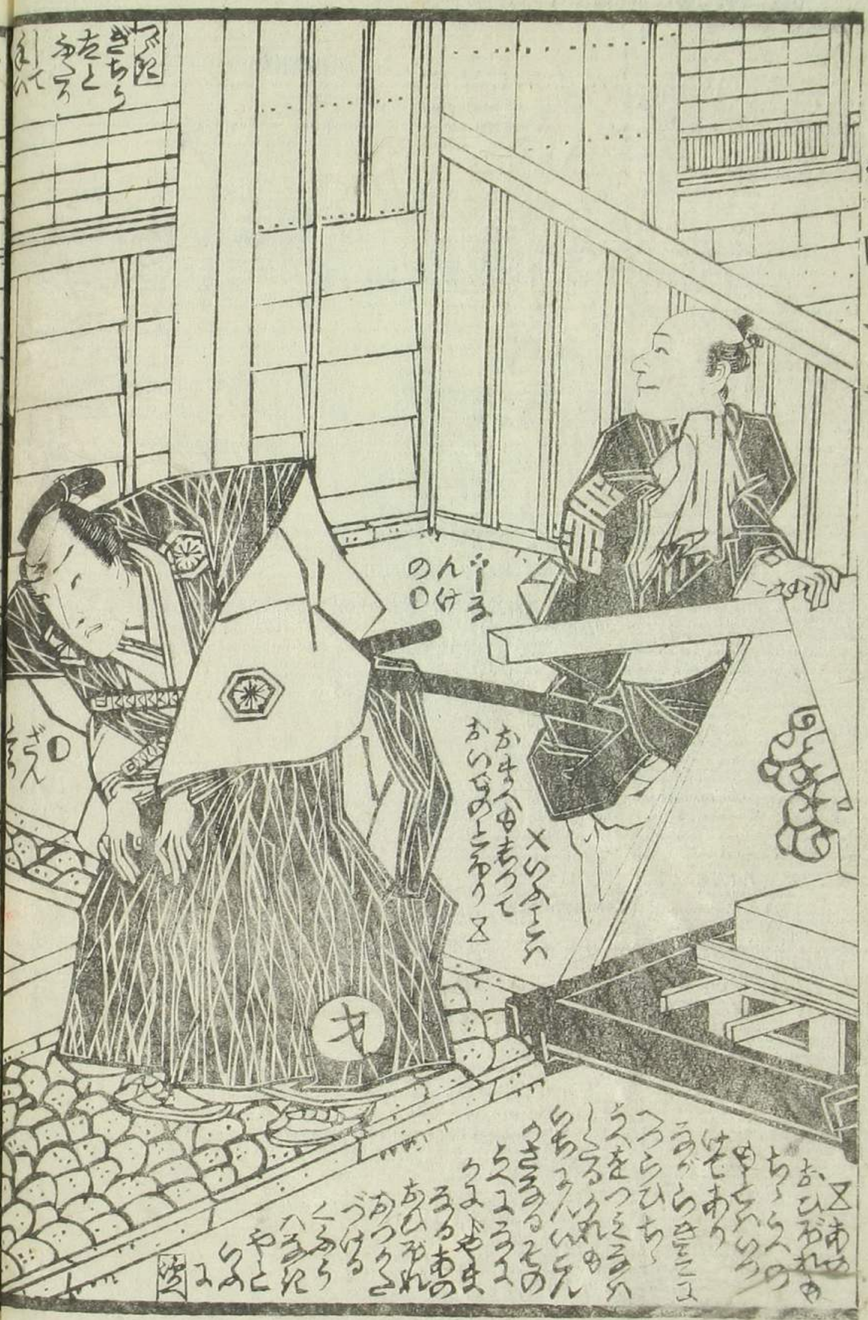

肥後の柔

多賀荘藏
信濃ら恩義に
一命まつらせの
あとに尚後篇
スとくべし これ
一奇談といへ
まくのこ
廣沼信濃



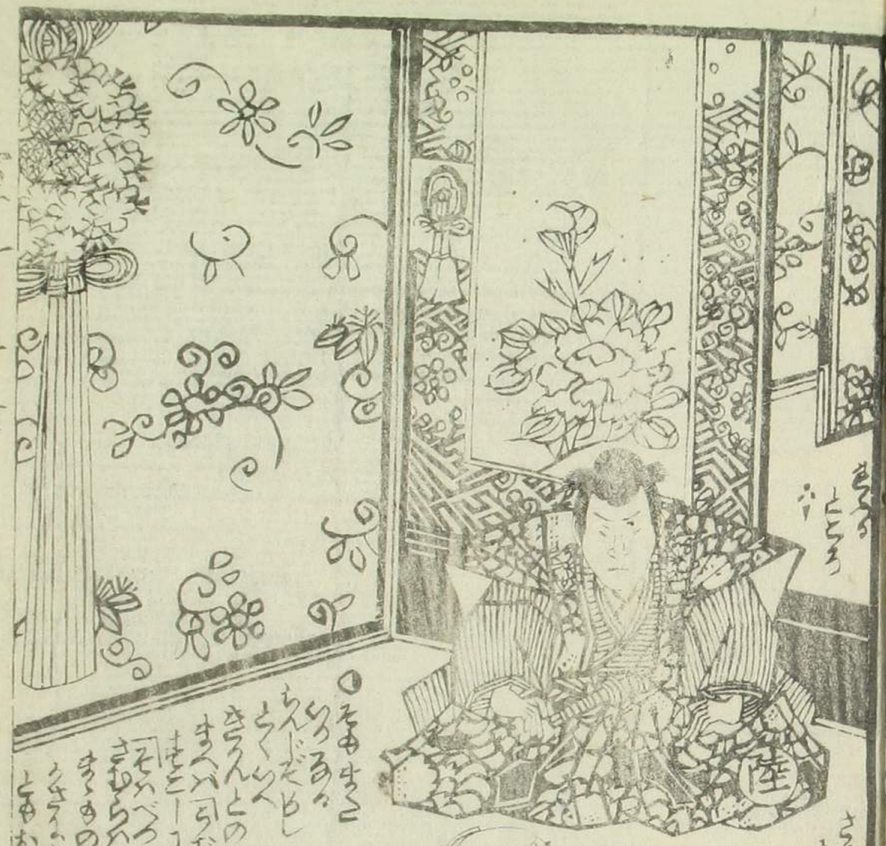






南

南



新局九尾傳 十編より十三編まで 爲永春水作 梅蝶樓國貞画

室町源氏胡蝶巻 十六篇 十七篇 十八篇 十九篇 種彦作 國貞画

鼠祠通夜譚 七編 八編 九編 種彦作 國貞画

童謡妙々車 廿四編 廿五編 廿六編 種彦作 國貞画

薄俤幻日記 十九編 二十編 廿一編 春水作 國貞画

七嫗と葛飾譚 十編 十一編 十二編 種彦作 國貞画

筆海四國聞書 十三編 十四編 十九編 種彦作 國貞画

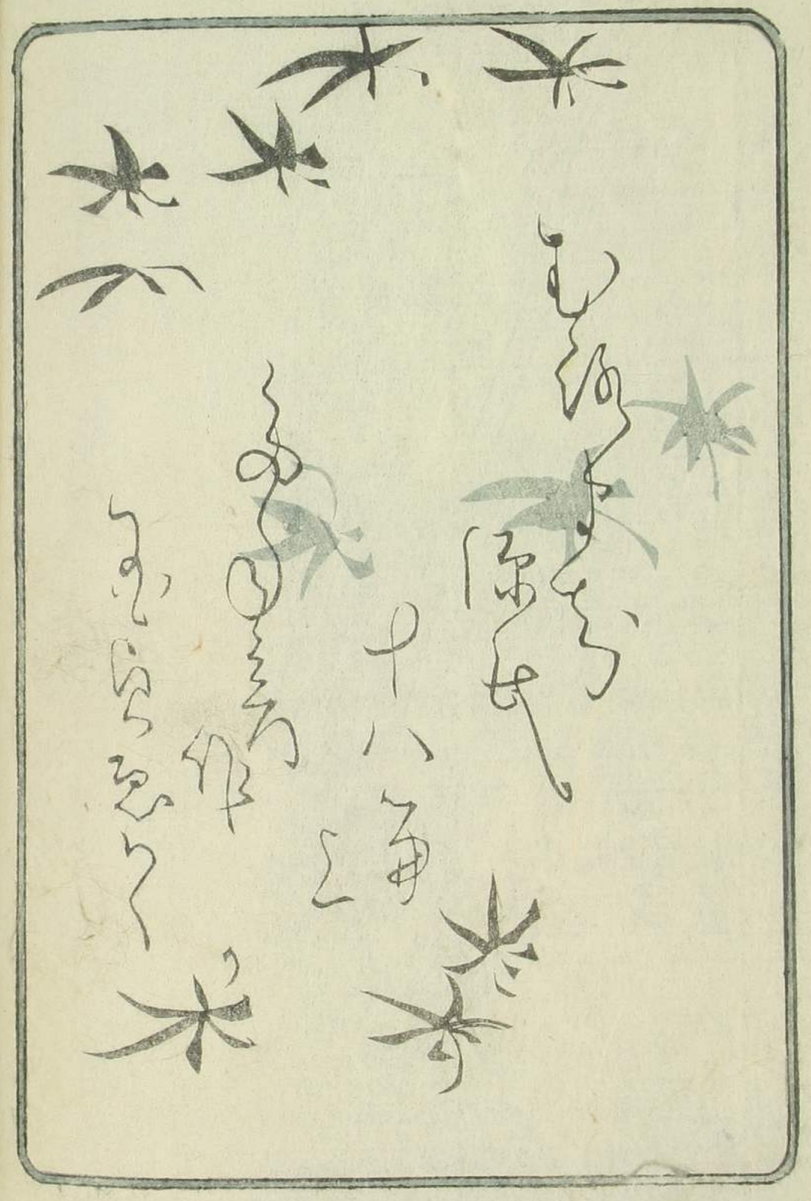
明鴉墨画迺禰福 十五編 十六編 十七編 種彦作 國貞画

花封荅玉章 十編 大尾 種彦作 國貞画

八犬傳犬の双紙 五十一編 五十二編 五十三編 柳亭録 國政画

南傳馬町壹丁目 蔦屋吉藏

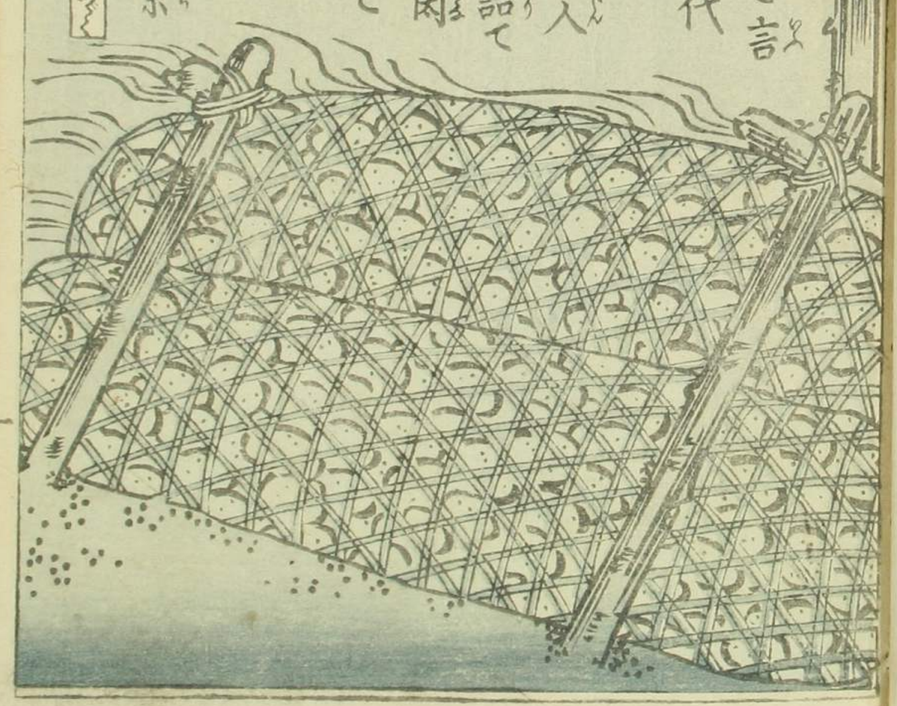
十八番上



大

四条河原に積塔會と言
支あり這ハ人王五十八代
光孝帝の姫宮兩夜の
内親王の報恩とて盲人
會して石を積平家を語て
遠忌を吊とり支に困
そのあるにはあらねど
此巻中の座頭なる
親王なるらぬ菊王も
いろ目盲と奈良の京
吉野内裏の

此文一丁あるべつゝ



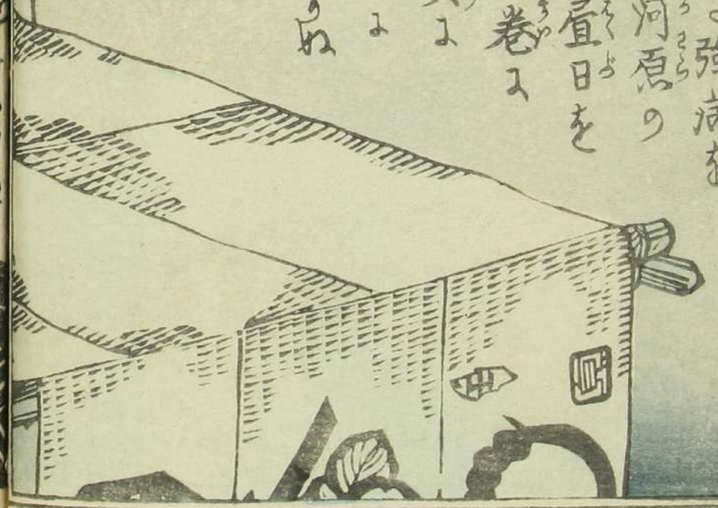
菊王丸

胡蝶

武者五郎

胡蝶巻

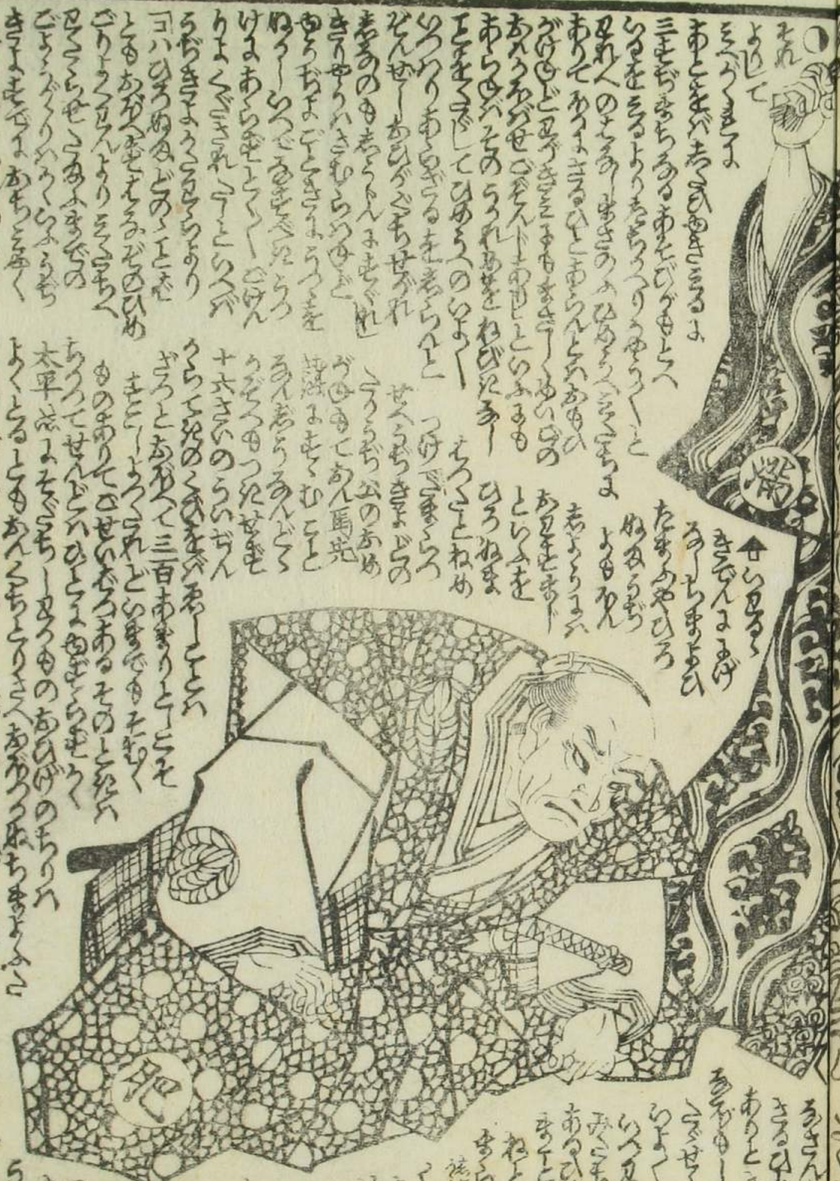
柳亭種彦記

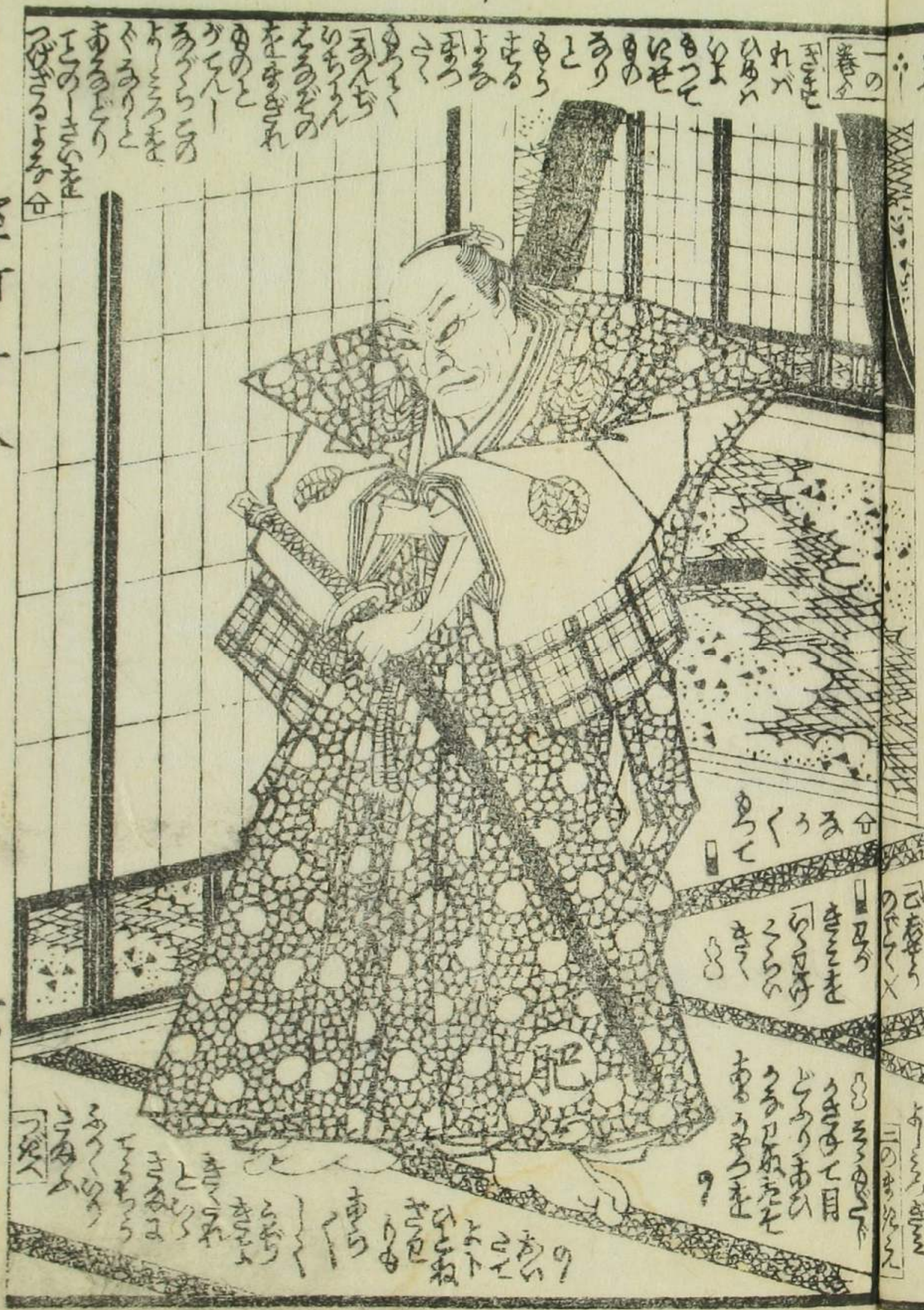


旧怨と父が家期の鬱憤と石より積る
意恨の數々晴さに難き強病を
琵琶諸共に歎ぜしも加茂の河原の
危難が僥倖悪血散じて昼日を
再度拜さの條をば此巻に
しも解べくりしを紙員に
限りあるを以て口画に
出して後編にゆずりぬ

睦

肥




肥

陸

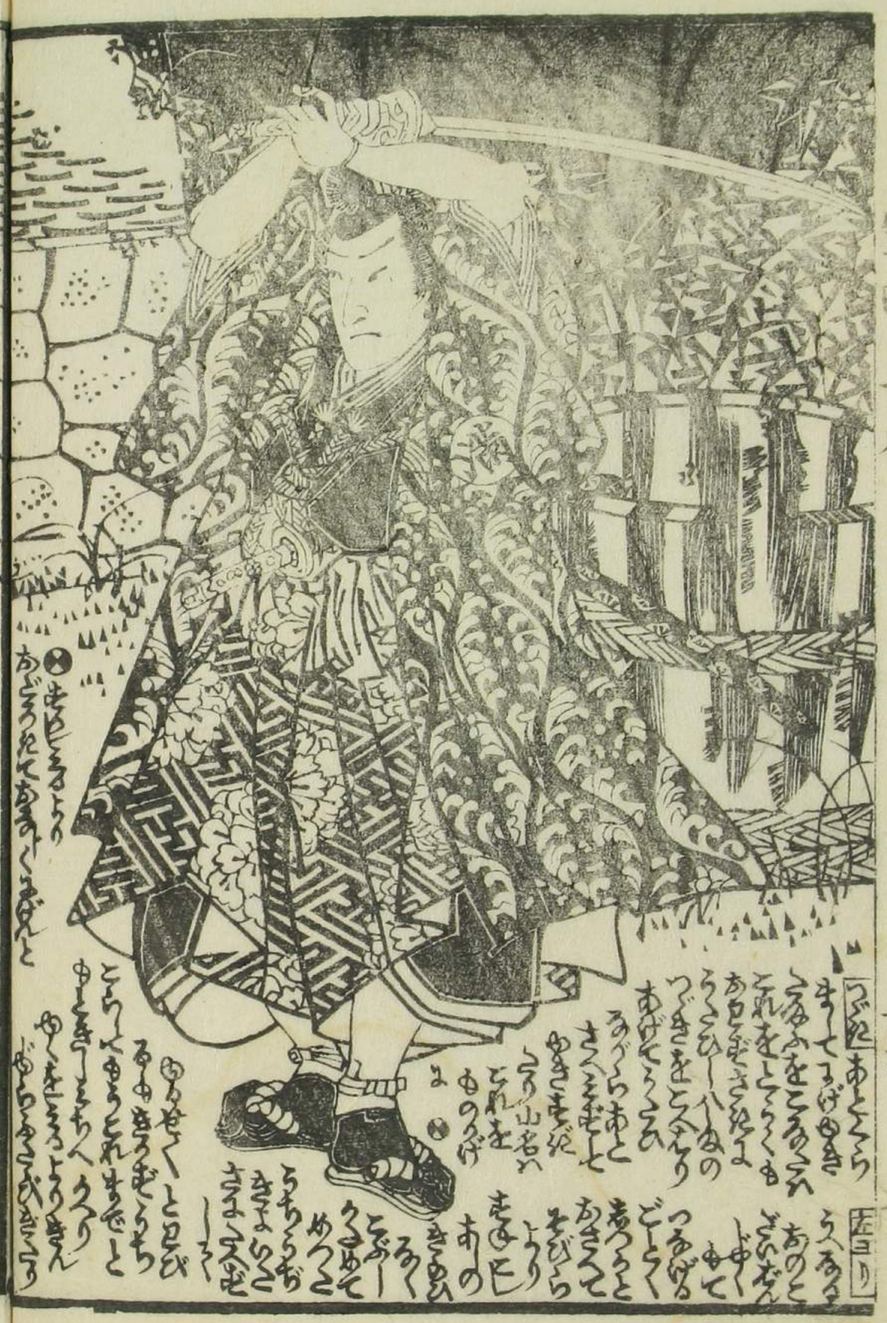
睦

實世散

厚化粧萬年嶋田

柳蔭月朝妻

十八扁下



陸

頼
円

頼

頼

明治三年庚午陽春開板標目

新局九尾傳 十編 十二編 為水春水作 梅蝶樓國貞画

室町源氏胡蝶巻 十六編 十七編 種彦作 國貞画

鼠祠通夜譚 十八編 九編 種彦作 國貞画

童謡妙々車 十四編 十五編 十六編 種彦作 國貞画

薄俤幻日記 十九編 二十編 二十一編 春水作 國貞画

七編さ葛飾譚 一編 一編 一二編 種彦作 國貞画

筆海四國聞書 十一編 十二編 種彦作 國貞画

明鴉堂画迦稲篇 十六編 十七編 種彦作 國貞画

花封答玉章 十編 十一編 大尾 種彦作 國貞画

八犬傳大の双紙 五十編 五十一編 五十二編 柳亭録 國政画

南傳馬町壹丁目 蔦屋吉蔵板

童所
源氏
小牒
乃卷
十八篇
禮
三月紀國貞通